

育てたい子ども像と躰・マナーの位相

—保護者への質問紙調査の結果から—

加野 芳正¹ ・ 村上 光朗² ・ 西本 佳代³
古賀 正義⁴ ・ 越智 康詞⁵ ・ 松田 恵示⁶

I. はじめに

2009年にわれわれが行った「大学生のマナーに関する意識と行動に関する調査」によれば、家庭で受けた躰の程度に関して、全体の約8割の学生が厳しくしつけられたと回答している（「とても厳しくしつけられた」14.9%、「どちらかといえば厳しくしつけられた」65.5%）。また、家庭内で、「もっともマナーを教えてくれた人」に関しては、「母親」が66.5%ともっとも多く、以下、「父親」（23.8%）、「祖母」（4.7%）、「祖父」（1.6%）、「姉・兄」（1.3%）の順で、家庭におけるマナー教育は、母親や父親を中心にして行われていることがわかる（西本・村上・古賀・越智・松田・加野2011、37頁）。

今日の家庭では躰がなおざりにされているとする言説がある。かつての家庭では厳しい躰がなされていたが、現代の家庭は、総じて躰に甘く無頓着だとする見方である。けれども上記の大学生からの回答は、そうした言説がきわめて疑わしいものであることを示している。

また、わが国では以前に比べ、マナーがますます悪くなってきているという悲観論も根強い。これもまた歴史をさかのぼってみれば、それがいかに一面的な見方であるかがわかる。たとえば、昭和30年あたりの新聞を紐解いてみれば、日常生活のマナーに関して、数多くの問題や悩みを抱えていたことが一目瞭然である¹⁾。

1964(昭和39)年の東京オリンピックを境にして、わが国のマナー状況は随分と改善されてきたのだが²⁾、それでも1970年代あたりには、いまからすると目に余るマナー違反が日常的な光景としてあった。一例をあげてみよう。

写真①は、1976年3月に営団地下鉄が乗車マナーの向上を呼びかけて貼り出したポスターである（出典 河北英也2008、62頁）。図



写真① マナーポスター
(1976年)

- 1 香川大学
- 2 鹿児島国際大学
- 3 山口福祉文化大学
- 4 中央大学
- 5 信州大学
- 6 東京学芸大学

像的な説明をしておく、ポスターの右側の女性二人は、靴のまま座席シートに乗って遊んでいる三人の悪戯坊主たちの「お母さん」である。ポスターは、迷惑な子どもの振る舞いに対して、お母さん二人が何も注意せずにおしゃべりに夢中になっている構図となっている。したがって、「コラッ坊ず！靴をぬげ。」は、悪戯坊主たちへの叱責であると同時に、自分の子どもに何も注意しない母親に対する叱責のメッセージでもある。

今日、もしもこのポスターが地下鉄に貼り出された場合、果たしてわれわれは、当時のポスターから発せられていたメッセージのリアリティを感じることが出来るだろうか。多分、出来ないはずである。なぜなら、今日の地下鉄や電車内で、土足のままシートに上がるような「無邪気な(!?)」子どもたちの姿などほとんど皆無に近いからだ。ただ、70年代までは、いまや稀少種ともなったこうした子どものマナー違反が日常的にみられていたことになる。こうした点を考えるとき、その後今日まで、われわれの車内マナーは、子どもたちのマナーも含めて随分と洗練・進化してきたことになる。

ところで、先ほどのポスターにあった「コラッ坊ず！靴をぬげ。」のメッセージは、裏を返せば、大人たちが面と向かって他人の子どもに直言・苦言を発することが困難になってきていることも示している。このポスターに対して、「人の子供をつかまえて、坊ずとは何だ」と、営団地下鉄に怒鳴り込んできた人がいたという笑うに笑えないエピソードもある(河北1989、82頁)。

森真一によれば、相手が将来苦勞したり傷ついたりしないようにとの思いから、きびしく注意したり、反省させたりする「やさしいきびしさ」は、すでに例外的存在だという。そのかわりに登場するのが、いま現に目の前にいる相手を傷つけたり、不快にさせたりしないように全力をあげて努力する「きびしいやさしさ」である(森2008、16-20頁)。他人を傷つけることを極度に恐れる時代には、マナー違反をしている子どもに対して、ポスターの向こう側にいる「見えない雷オヤジ」からの怒りのメッセージを期待するほかないのである。

それでは、地域の大人たちや、心ある他人からのきびしい躰が期待できない時代に(そして同時にマナー違反への世間のまなざしがますます強まっている時代に)、子どもへの躰は一体誰が行うのだろうか。それは、広田照幸も述べるように、いまや「家族」をおいて他にない。伝統的な慣行や価値観を教えた地域共同体は、次第にその影響力を弱めていき、ほとんど消滅しかけている。また学校的価値や規範も、保護者からの批判に晒されるなかで、相対的にその地位を下げている。その結果、家族という単位が、子どもの教育に関する最終的な責任を一身に引き受けざるをえなくなっているのが現代であり、「現代の親たちは、しつけや教育の担当者でもあり、手配師でもあり、最終的な責任者」でもある(広田1999、127-128頁)。

こうして家族は、子どもの躰に関して、いわば中心的かつ独占的なセクターとなったわけであるが、それでは、家族、なかでも父母に代表される保護者の躰やマナーに関する意識は、はたして現在どうなっているのだろうか。社会的環境の急激な変化のなかで、躰やマナーの位置づけや意味づけが大きく変わってきていることも考えられる。

たとえば、食卓は、家庭における躰の場として伝統的に重要であり、とりわけ食事作法はその中核にあったと考えられるが、家族が一堂に会する一家団欒の場(「共食」)が崩れてきていることは周知の事実である。1983(昭和58)年に公開された森田芳光監督の「家族ゲーム」(写真②)は、横一列に並んだ食卓で(それはキリストの「最後の晩餐」のパロディ



写真② 森田芳光『家族ゲーム』

ともいわれている)、家族がひたすらに「食餌」をかき込むさまを描いている。家族団欒の対極にあるようなそのシーンは、個食から孤食へと移行してゆく現代家族の食卓の光景を象徴的に映し出している(出典 森田芳光監督作品、1983)。

共食することで、はじめて親から子へと代々伝えられてゆく作法もあることだろう。たとえば箸の作法などはその代表例だろうが、「嫌い箸」³⁾といわれる一連の作法のうちで、今日でも生き残っているものは、せいぜい「渡し箸」(箸から箸へ食べ物を渡す。お骨拾いを連想させて嫌われる)くらいしかないのではないか。

岩村暢子は、家族の食卓に並ぶ実際の食事を(被調査者に)写真撮影させるユニークな食卓調査を行ってきている。驚かされるのは、鍋やフライパンなどの調理器具に、直接に箸やスプーンを突っ込んで食べている家庭があることだ。子どもだけの食事や主婦一人の昼食によく見られる光景で、「洗い物を増やしたくないから」「面倒だから」との理由によるらしい(岩村2010、72頁)。岩村によれば、そもそもいまの子どもたちは、0歳の離乳食のスタート時から、親とは食べる時間や場所、さらには食べているものも違う「別食育ち」になっているという。家庭の食事メニューが加工品化しているため、離乳食期の赤ん坊に親と同じものを与えにくくなっているのも大きな原因の一つだとされる。やがて子どもが他の家族と一緒に食卓を囲むことのできる年齢になっても、「子どもはうるさいから別に食べさせる」「子どもに食べさせてから、私は一人でゆっくり食べたい」「子どもは待てないから簡単なもので先に食べさせる」などの別食行動へと続くという(岩村2010、165頁)。

ただ、個食や孤食、別食がいかに進んだとしても、これだけは譲れない食卓マナーというものもまたあるはずである。たとえば、村上紀子の報告によれば、食事時の「他人のマナーで気になることは？」への回答として、20代の母親たちは、「ひじをつけて食べる」や「箸づかいができていない」には他世代よりも無頓着であるものの、「音を立てて食べる」を圧倒的に嫌っているという。そしてこの「音を立てて食べる」は、いずれの世代の母親においても一番に嫌われるマナー違反だという(村上1999、395-396頁)。先に述べた「渡し箸」のタブーなども、ほとんどの箸の作法が廃れるなかで、不思議と生き残ってきている。そこには、福田育弘が指摘するように、「けがれ」に関する日本独自の感受性がはたらいっているのかもしれない(福田2007、69-73頁)。

こうした食事マナーに関する社会的感受性は、社会環境やメディア、食事スタイルの変化とともに移ろいゆく側面ももつ。井上忠司は、「食事の姿勢に関するマナー」を、「箱膳世代」「チャブ台世代」「テーブル世代」とで比較しているが、「肘をつかない」は、テーブル世代にきわだって特徴的なマナーであることを明らかにしている。また、「食事の会話に対する態度」では、箱膳とチャブ台の両世代とも、「会話は厳禁」が多いのに対して、テーブル世代では、「話してもよい」が最多になっている。ただし、「口に物を入れたまま話さない」は、いずれの世代でも共通のタブーとしてあがってきている(井上1999、110-112頁)。

このように、食事マナーひとつとってみても、世代や階層、生活スタイルに応じて、躰やマナーの位置づけや意味づけはきわめて多様性に満ちている(同時に共通性も有しながら)。それはまた、食事以外の躰やマナー全般に関しても同様であろう。そして、こうした躰やマナーの特色は、保護者から子へと、その身体技法や家庭教育を通じて伝えられてゆくことになる。

以下では、われわれの行った保護者への質問紙調査をもとに、保護者のマナー意識や行動の実態、子どもへの躰やマナー教育に対する考えなどを明らかにしてゆきたいと思う。

II. 分析データ

本稿は、2012年6～7月にかけて実施された「保護者のマナーに対する意識と行動に関する調査」

を分析対象としている。この調査は、香川、東京、長野、兵庫、鹿児島県の5都県で実施され、合計2,293名の保護者からの回答を得ている（小学生の保護者、1,108名、中学生の保護者、1,185名）。ちなみに、都県ごとの保護者の人数と、保護者が属している各学校数の内訳は以下のとおりである（表1、表2参照）。また、保護者の主な属性については表3に掲げている。続柄に関しては、その大半が、小学5年生または中学2年生を子どもにもつ母親であり、年齢では40代がもっとも多くなっている。

Ⅲ. 分析結果

1. 育てたい子ども像

保護者は、自分の子どもを、どのような子どもに育てたいと考えているのだろうか。「育てたい子どもの姿（イメージ）」を見てゆくことにしたい（表4参照）。全部で9つの「育てたい子どもの姿」に対して、それぞれ「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」まで4つの選択肢から回答してもらっている。

驚いたことに、「勉強ができる子ども」はここでは中心的なイメージとはなっていない。「とてもあてはまる」と回答した保護者は、わずか2割ほどにとどまっており、「あまりあてはまらない」と答えた保護者も14.5%存在している。これに比して、「心のやさしい子ども」と「社会のルールを守る子ども」は「とてもあてはまる」の割合が、それぞれ83.0%、82.4%となっている。また、「礼儀正しい子ども」や「正直な子ども」といったイメージも高い割合で支持されていることがわかる。保護者は、勉強よりもむしろ、社会の中できちんとした振る舞いができることや、心がやさしく正直であることを、わが子に期待している。

では、子どもの性別によって保護者の期待する内容は異なるのだろうか（表5参照）。有意な差が見られたのは「根気強い子ども」「自分の意見をハッキリ言う子ども」「上品な子ども」の三項目

表1 各都県の保護者数

	小学生の保護者数	中学生の保護者数	合計
香川県	672	782	1454
東京都	266	278	544
長野県	59	125	184
兵庫県	82	0	82
鹿児島県	29	0	29
合計	1108	1185	2293

表2 各都県の学校数

	香川県	東京都	長野県	兵庫県	鹿児島県	合計
小学校	10	5	1	1	1	18
中学校	6	4	1	0	0	11
合計	16	9	2	1	1	29

表3 保護者の属性（続柄、年齢、子どもの学年）

続柄	母親	父親	その他	合計		
	92.1	7.0	0.9	100.0 (2277)		
年齢	30代以下	40代	50代以上	合計		
	29.9	63.3	6.8	100.0 (2257)		
子どもの学年	小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生	合計
	45.0	3.0	3.7	47.0	1.3	100.0 (2290)

(*表3の数字は%を示す。以下の表に関しても同様である。)

表4 育てたい子ども像

	とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
心のやさしい子どもに育てたい	83.0	16.5	0.4	0.1	100.0 (2288)
礼儀正しい子どもに育てたい	76.5	23.0	0.4	0.1	100.0 (2288)
根気強い子どもに育てたい	70.1	28.5	1.1	0.3	100.0 (2288)
他人の意見を聞ける子どもに育てたい	66.4	32.4	1.0	0.2	100.0 (2284)
自分の意見をハッキリ言う子どもに育てたい	49.6	47.6	2.6	0.2	100.0 (2283)
正直な子どもに育てたい	74.3	24.8	0.7	0.2	100.0 (2284)
上品な子どもに育てたい	17.0	53.8	27.2	2.1	100.0 (2275)
勉強ができる子どもに育てたい	22.4	61.8	14.5	1.4	100.0 (2278)
社会のルールを守る子どもに育てたい	82.4	17.0	0.4	0.2	100.0 (2286)

表5 育てたい子どもの姿 (男子 対 女子)

		とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
心のやさしい子どもに育てたい	男子	81.3	18.0	0.5	0.2	100.0 (1131)
	女子	84.7	15.0	0.3	0.1	100.0 (1156)
礼儀正しい子どもに育てたい	男子	75.9	23.5	0.4	0.2	100.0 (1130)
	女子	77.0	22.6	0.3	0.1	100.0 (1157)
根気強い子どもに育てたい	男子	73.4	25.4	0.9	0.4	100.0 (1131) **
	女子	66.9	31.7	1.3	0.2	100.0 (1156)
他人の意見を聞ける子どもに育てたい	男子	68.0	30.9	1.0	0.2	100.0 (1127)
	女子	64.9	33.9	1.0	0.2	100.0 (1156)
自分の意見をハッキリ言う子どもに育てたい	男子	54.0	43.7	2.1	0.2	100.0 (1128) ***
	女子	45.2	51.5	3.0	0.3	100.0 (1154)
正直な子どもに育てたい	男子	75.0	24.3	0.5	0.2	100.0 (1129)
	女子	73.7	25.3	0.8	0.2	100.0 (1154)
上品な子どもに育てたい	男子	13.3	52.7	31.4	2.6	100.0 (1123) ***
	女子	20.6	54.8	23.0	1.6	100.0 (1151)
勉強ができる子どもに育てたい	男子	23.5	61.1	14.2	1.2	100.0 (1126)
	女子	21.3	62.4	14.8	1.6	100.0 (1151)
社会のルールを守る子どもに育てたい	男子	83.3	16.2	0.4	0.2	100.0 (1130)
	女子	81.5	17.8	0.5	0.2	100.0 (1155)

***p<0.001、**p<0.01、*p<0.05 以下同様に表記

であり、前の二つが男子に多く、最後の「上品な子ども」は、女子に期待する内容として多くなっている。その他の項目に関しては、とくに有意な差異は認められなかった。

こうした「育てたい子どもの姿」に関して、地域差や階層差は果たして存在するだろうか。

調査対象県は、香川、東京、長野、兵庫、鹿児島島の5つであるが、兵庫と鹿児島島の両県については、保護者のサンプル数がそれほど多くない。そのため東京と東京以外の地方県とに二分してクロス集計をおこなってみた。関連の見られた項目はあまりなかったものの、有意な差異が認められた項目としては、表6に示すとおり、「他人の意見を聞ける子ども」と「上品な子ども」の二つをあげることができる。

東京の保護者の方が、「他人の意見を聞ける子ども」と「上品な子ども」への期待度が高い傾向にあるといえる。

階層差についてはどうだろうか。本調査では家庭の文化水準や所得水準を測る明確な変数はないものの、ここでは三つの指標を立てて考えてみたい。ひとつは、「わが子をどの学校段階まで進学させたいか」という進学アスピレーションの指標。第二は、子どもを塾に行かせたり、習い事をさせているかどうかという「塾・習い事」の有無によるもの。そして第三の指標は、子どもが通学している学校が附属校である場合と、それ以外の学校の場合とである（これらの指標は互いに相関していることが予想されるから、より高度の統計的分析によりその連関性を問うべきであるが、本稿ではクロス集計での分析にとどめておきたい）。

表7は、わが子をどの学校段階まで進学させたいかに関して、「中学・高校まで」と「大学・大学院まで」とに区分し、育てたい子どもの姿の違いをみたものである。「心のやさしい子ども」と「社会のルールを守る子ども」以外はいずれも有意差が認められ、とくに「根気強い子ども」、「上品な子ども」、「勉強ができる子ども」に関しては強い相関が認められる。「大学・大学院まで」進学させたい保護者ほど「根気強く、上品で、勉強ができる」子ども像をより多く期待していることがみてとれる。

表8は、育てたい子どもの姿に関して、附属校（国立）と附属校以外（すべて公立）とでクロスさせたもののうち、有意な差がみられた項目を選び出したものである。先ほどの「根気強く、上品で、

表6 育てたい子ども像（東京 対 地方）

		とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
他人の意見を聞ける子どもに育てたい	東京	71.1	28.1	0.7	0.0	100.0 (544) *
	地方	64.9	33.7	1.1	0.2	100.0 (1740)
上品な子どもに育てたい	東京	22.1	55.0	21.6	1.3	100.0 (542) ***
	地方	15.3	53.4	28.9	2.3	100.0 (1733)

表7 育てたい子ども像（中学・高校まで 対 大学・大学院まで；「わからない」を除く）

		とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
心のやさしい子どもに育てたい	中・高まで	81.1	18.3	0.6	0.0	100.0 (323)
	大学・院	84.6	15.0	0.4	0.0	100.0 (1648)
礼儀正しい子どもに育てたい	中・高まで	70.8	28.6	0.6	0.0	100.0 (322) *
	大学・院	78.9	20.8	0.3	0.1	100.0 (1648)
根気強い子どもに育てたい	中・高まで	58.2	39.9	1.9	0.0	100.0 (323) ***
	大学・院	73.2	26.0	0.7	0.1	100.0 (1648)
他人の意見を聞ける子どもに育てたい	中・高まで	61.1	36.1	2.8	0.0	100.0 (321) **
	大学・院	67.8	31.5	0.6	0.1	100.0 (1645)
自分の意見をハッキリ言う子どもに育てたい	中・高まで	41.9	53.7	4.0	0.3	100.0 (322) **
	大学・院	52.2	45.7	2.1	0.1	100.0 (1644)
正直な子どもに育てたい	中・高まで	74.3	24.1	1.6	0.0	100.0 (319) **
	大学・院	75.3	24.5	0.2	0.1	100.0 (1647)
上品な子どもに育てたい	中・高まで	8.8	46.9	40.6	3.8	100.0 (318) ***
	大学・院	19.1	56.8	22.7	1.3	100.0 (1640)
勉強ができる子どもに育てたい	中・高まで	11.6	53.1	31.9	3.4	100.0 (320) ***
	大学・院	25.9	64.7	8.9	0.5	100.0 (1642)
社会のルールを守る子どもに育てたい	中・高まで	79.4	19.6	0.9	0.0	100.0 (321)
	大学・院	83.3	16.4	0.2	0.1	100.0 (1648)

勉強ができる」という子ども像は、この場合、附属校に特徴的な姿としても浮かび上がってくる。

また、「塾・習い事」の有無に関するクロス分析(表9)では、進学アスペレーションとほぼ同じ項目(表9も有意差のある項目のみを抜き出している)において有意な差が認められる。

これらの結果から、子どもに「大学以上の進学を期待」し、「附属に通わせ」ながら、「塾・習い事」をさせている保護者層において、総じて子どもへの期待度が高く、とりわけ、「上品さ」や「勉強」という二点において差異が際立っていることがみてとれる。

2. 家庭での躰とマナー

保護者が子どもに対して行う躰の程度はどうであろうか。表10は、自分の子どもに対するマナーやルールに関する躰が「厳しい」か「甘い」かを尋ねたものである。「とても厳しい」という回答の割合は少ないものの、「どちらかといえば厳しい」までを含むと、躰に対して「厳しい派」対「甘い派」(「とても甘い」+「どちらかという甘い」)の比率は、約7対3であり、「厳しい派」の方が多数である。

それでは、保護者自身は、かつてどのような躰を受けて育ってきたのであろうか。表11がそれである。それをみると、「とても厳しい」躰を受けたと考える保護者の割合は2割ほどであり、現在自分が子どもにしている躰よりも、かつての世代から受けた躰の方がより厳しかったと感じている

表8 育てたい子ども像(附属 対 附属以外)

		とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計	
根気強い子どもに育てたい	附属	76.5	22.8	0.8	0.0	100.0 (391)	*
	附属以外	68.8	29.7	1.2	0.3	100.0 (1897)	
上品な子どもに育てたい	附属	26.3	54.5	18.7	0.5	100.0 (391)	***
	附属以外	15.0	53.7	28.9	2.4	100.0 (1884)	
勉強ができる子どもに育てたい	附属	37.3	57.6	4.9	0.3	100.0 (389)	***
	附属以外	19.3	62.6	16.5	1.6	100.0 (1889)	

表9 育てたい子ども像(塾・習い事をしている 対 していない)

		とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計	
礼儀正しい子どもに育てたい	塾・習い事している	77.2	22.4	0.3	0.1	100.0 (1876)	*
	していない	73.1	25.5	1.0	0.5	100.0 (412)	
根気強い子どもに育てたい	塾・習い事している	71.4	27.4	1.1	0.2	100.0 (1876)	*
	していない	64.3	33.7	1.2	0.7	100.0 (412)	
他人の意見を聞ける子どもに育てたい	塾・習い事している	67.1	32.1	0.7	0.1	100.0 (1873)	**
	していない	63.3	33.8	2.4	0.5	100.0 (411)	
自分の意見をハッキリ言う子どもに育てたい	塾・習い事している	49.7	48.0	2.2	0.1	100.0 (1872)	**
	していない	48.9	46.0	4.4	0.7	100.0 (411)	
上品な子どもに育てたい	塾・習い事している	18.1	54.5	26.1	1.3	100.0 (1867)	***
	していない	11.8	50.7	31.9	5.6	100.0 (408)	
勉強ができる子どもに育てたい	塾・習い事している	23.2	62.7	13.2	0.9	100.0 (1869)	***
	していない	18.6	57.5	20.3	3.7	100.0 (409)	
社会のルールを守る子どもに育てたい	塾・習い事している	83.3	16.2	0.4	0.1	100.0 (1874)	*
	していない	78.2	20.6	0.7	0.5	100.0 (412)	

ことがわかる。

また、かつて受けた躰と、保護者自身が現在行っている躰との間に相関はあるのだろうか。表12のように、かつて「厳しい躰を受けた」保護者ほど、その子どもたちに対してより「厳しい躰」をする傾向が強くなっていることが見てとれる。

こうした躰の程度は、保護者の年齢や性別、子どもの性別や出生順位によって差がみられるのだろうか。

表13は、保護者の年齢と躰の程度とをクロスしたものである。年代が上の保護者の方が、若い年齢の保護者よりも、躰に関しては厳しい態度をとるように予想されがちだが、結果はそうになっておらず、また有意な差も認められない。

では、父親と母親によってそれぞれ躰の程度は異なるだろうか(表14)。「厳父慈母」がわが国の躰の伝統的スタイルだったとすれば、「育メン」に象徴されるようなやさしいパパの登場により、今日は「厳母慈父」へとすっかり交替したとの論もみられる。確かに表14を見る限りでは、「とても」と「どちらかといえば」の割合の合計からは、母親の方に「厳しく」が多く、父親の方には「甘い」が多くなっているようにも見受けられる。けれども有意差においては十分な水準に達していない。

一方、子どもの性別ではどうだろうか。表15の結果からは、男子も女子もほぼ平等であり、子どもの性別の違いは躰の程度に影響をおよぼしてはいない。他方で、子どもの出生順位に関しては、

表10 家庭でのマナーやルールに関する躰の程度

とても厳しい	どちらかといえば 厳しい	どちらかといえば 甘い	とても甘い	合計
7.7	65.6	25.7	0.9	100.0 (2253)

表11 保護者が育った家庭でのマナーやルールに関する躰の程度

とても厳しかった	どちらかといえば 厳しかった	どちらかといえば 甘かった	とても甘かった	合計
20.4	57.3	20.9	1.5	100.0 (2274)

表12 保護者自身が受けた躰と現在行っている躰との関係

		現在行っている躰				合計
		とても厳しい	どちらかとい えば厳しい	どちらかとい えば甘い	とても甘い	
保護者が 受けた躰	とても厳しかった	20.3	67.0	11.8	0.9	100.0 (458)
	どちらかといえば厳しかった	5.1	73.2	21.4	0.4	100.0 (1282)
	どちらかといえば甘かった	3.0	45.3	50.2	1.5	100.0 (464)
	とても甘かった	6.3	37.5	43.8	12.5	100.0 (32)

表13 保護者の年齢と躰の程度

		現在行っている躰				合計
		とても厳しい	どちらかとい えば厳しい	どちらかとい えば甘い	とても甘い	
保護者の年齢	30代まで	8.4	66.0	24.6	1.0	100.0 (670)
	40代	7.5	66.8	25.0	0.7	100.0 (1396)
	50代以上	7.3	55.6	35.8	1.3	100.0 (151)

明らかに有意な差がみられ、出生順位が早いほど厳しい躰になりがちで、反対に出生順位が遅ければ遅いほど、甘い躰になる傾向がある(表16参照のこと)。

3. 躰において重視していること

保護者は、躰において何を重視しているのだろうか。表17によれば、もっとも重視している内容は、まずは「挨拶ができる」ことである。8割近くの保護者が「非常に重視している」と回答している。一方で「食事の作法を守る」に関して言えば、「非常に重視している」割合は38.8%であり、他の項目に比較すると、さほど高い値とはなっていない。「はじめに」でも記したように、食事スタイルの変化や食事の個食化が進むなかで、「食事の作法」そのものへの意識が全般的に弱くなってきていることも事実であろう。ただ、表18をみると、とても興味深いことに、「挨拶ができる」や「食事の作法を守る」といった「型」を伴う基本的な躰内容に関して、むしろ若い世代の保護者で

表14 保護者の性別と躰の程度

		現在行っている躰				合計
		とても厳しい	どちらかとい えば厳しい	どちらかとい えば甘い	とても甘い	
続柄	母親	7.8	66.5	24.9	0.9	100.0 (2063)
	父親	8.2	57.0	34.2	0.6	100.0 (158)

表15 子どもの性別と躰の程度

		現在行っている躰				合計
		とても厳しい	どちらかとい えば厳しい	どちらかとい えば甘い	とても甘い	
子どもの性別	男子	7.3	65.9	25.7	1.1	100.0 (1111)
	女子	8.2	65.4	25.8	0.7	100.0 (1141)

表16 子どもの出生順位と現在行っている躰の程度

		現在行っている躰				合計
		とても厳しい	どちらかとい えば厳しい	どちらかとい えば甘い	とても甘い	
子どもの出生順位	第一子	8.7	67.7	22.5	1.0	100.0 (1145) ***
	第二子	6.9	66.2	26.2	0.7	100.0 (828)
	第三子	6.3	57.5	35.3	0.9	100.0 (221)
	第四子以上	2.2	50.0	47.8	0.0	100.0 (46)

表17 躰において重視している内容

	非常に重視 している	ある程度重 視している	あまり重視 していない	全く重視 していない	合計
年上の人に対して失礼のない行動をとることができる	37.2	59.3	3.4	0.0	100.0 (2279)
感謝の気持ちを持つことができる	69.1	29.6	1.3	0.0	100.0 (2286)
自分が悪いと思ったら謝ることができる	69.5	28.9	1.4	0.1	100.0 (2285)
挨拶ができる	79.0	20.0	0.9	0.0	100.0 (2285)
食事の作法を守ることができる	38.8	55.4	5.6	0.2	100.0 (2284)
公共の場で相応しいふるまいができる	48.1	48.8	2.9	0.2	100.0 (2283)
自分で善悪を判断して行動ができる	67.8	31.1	1.1	0.0	100.0 (2283)

あるほど「非常に重視している」割合が高くなっている。

一般には、若い世代であるほど「作法離れ」が進んでいくと安易に考えられがちであるが、村上紀子は、この点に関して別の可能性も指摘している。それは「所作の美しさの追求」というインセンティブが、若い人たちのおしゃれ感覚や、上品にふるまうというパフォーマンス感覚と結び付き、新しい食卓のマナーを創造していくという可能性である。いいかえれば、「人前で恥をかかないために」という減点法的で伝統的な作法ではなく、ふるまいの美しさ、楽しさの追求という、いわば演劇的なセンスにみちた作法追求の可能性である（村上1999、396-397頁）。もちろん、こうした新しい作法への感覚が、果たして30代以下の若い保護者に実際に芽生えてきているのかどうかの確証はない。ただ、若い世代であればあるほど、減点法的な作法からは自由であるため、逆に作法を楽しむゆとりやエネルギーも大きいということは言えそうである。

表19は、躰において重視している内容を、父親と母親とで比較したものである。今回の調査では、父親のサンプルが160名（全体の7%）と少ないこともあり、十分な比較にはなっていないものの、きわめて特徴的な傾向が示されている。それは一見してわかるように、いずれの内容においても母親の方が父親に比べ、「非常に重視している」の割合が高くなっていることである。もちろん実際の躰場面においては、各家庭で躰をする上での「父親—母親」の役割分担というものがあると思われる。

たとえば、マンガの「サザエさん」にたびたび登場する名シーン、カツオのイタズラにきついお灸をすえる際に、父親である波平が、カツオをわざわざ床の間に正座させて一喝するあのシーン、などを思い浮かべることができる。普段は構えていなくとも、ここぞという場面では父親の出番と

表18 躰において重視している内容（世代間比較）

		非常に重視している	ある程度重視している	あまり重視していない	全く重視していない	合計
年上の人に対して失礼のない行動をとることができる	30代まで	34.8	59.9	5.1	0.1	100.0 (669)
	40代	37.9	59.4	2.7	0.0	100.0 (1422)
	50代以上	42.1	55.3	2.6	0.0	100.0 (152)
感謝の気持ちを持つことができる	30代まで	69.4	28.2	2.4	0.0	100.0 (673) *
	40代	69.3	30.0	0.7	0.0	100.0 (1424)
	50代以上	64.7	33.3	2.0	0.0	100.0 (153)
自分が悪いと思ったら謝ることができる	30代まで	71.8	26.4	1.5	0.3	100.0 (673)
	40代	69.4	29.3	1.3	0.0	100.0 (1423)
	50代以上	62.1	35.3	2.6	0.0	100.0 (153)
挨拶ができる	30代まで	81.5	17.1	1.5	0.0	100.0 (674) *
	40代	78.3	21.0	0.6	0.0	100.0 (1422)
	50代以上	74.5	24.8	0.7	0.0	100.0 (153)
食事の作法を守ることができる	30代まで	44.0	50.4	5.5	0.1	100.0 (673) **
	40代	37.6	57.3	4.9	0.2	100.0 (1423)
	50代以上	29.6	60.5	9.9	0.0	100.0 (152)
公共の場で相応しいふるまいができる	30代まで	44.7	51.1	4.0	0.1	100.0 (673)
	40代	50.1	47.6	2.2	0.1	100.0 (1422)
	50代以上	46.1	49.3	3.9	0.7	100.0 (152)
自分で善悪を判断して行動ができる	30代まで	66.0	32.4	1.6	0.0	100.0 (673)
	40代	69.1	30.0	1.0	0.0	100.0 (1422)
	50代以上	65.1	34.2	0.7	0.0	100.0 (152)

いうわけだ。だから、母親の躰への意識が高いからといって、かならずしも母親が躰の中心的存在であるとはいえないものの、意識面における優位はやはり認めざるを得ない。

4. マナーを学ぶ場所・相手・媒体

保護者は、子どもたちがどこでマナーを学ぶべきだと考えているのだろうか。「家庭で」「学校で」「地域で」「友だちから」「テレビ・インターネットなどのメディアから」「その他」のなかから、最もあてはまるものをひとつ選択してもらった結果が、表20である。

「はじめに」でも記した広田照幸の言葉を裏付けるように、保護者の9割が「家庭」を挙げている。マナーを学ぶ中心的な場所は家庭だと、ほとんどの保護者が考えているようである。「学校」や「地域」はごくわずかの回答でしかない。また「友だち」「テレビ・インターネットなどのメディア」への回答は見当たらない。

ところが面白いことに、「子どものマナーが悪くなっている」と考えている保護者に対して、「マナーが悪くなったのは何の影響が強いかな」を尋ねると（ここでは「家庭」「学校」「地域」「テレビ・インターネットなどのメディア」「その他」のなかから最もあてはまるものをひとつ選択する）、「テレビ・インターネット」が3割近くも占めている（表21参照）。

表19 躰において重視している内容(父親 対 母親)

		非常に重視している	ある程度重視している	あまり重視していない	全く重視していない	合計
年上の人に対して失礼のない行動をとることができる	母親	37.6	59.2	3.2	0.0	100.0 (2088) *
	父親	31.0	62.0	7.0	0.0	100.0 (158)
感謝の気持ちを持つことができる	母親	69.8	29.0	1.2	0.0	100.0 (2094) *
	父親	60.1	38.0	1.9	0.0	100.0 (158)
自分が悪いと思ったら謝ることができる	母親	70.4	28.3	1.2	0.1	100.0 (2093) **
	父親	60.1	35.4	4.4	0.0	100.0 (158)
挨拶ができる	母親	79.8	19.3	0.9	0.0	100.0 (2094) *
	父親	70.7	28.0	1.3	0.0	100.0 (157)
食事の作法を守ることができる	母親	39.6	55.4	4.8	0.1	100.0 (2093) ***
	父親	31.6	53.8	13.9	0.6	100.0 (158)
公共の場で相応しいふるまいができる	母親	48.9	48.5	2.5	0.0	100.0 (2091) ***
	父親	39.2	51.9	7.6	1.3	100.0 (158)
自分で善悪を判断して行動ができる	母親	68.3	30.6	1.1	0.0	100.0 (2091)
	父親	62.0	36.1	1.9	0.0	100.0 (158)

表20 マナーを学ぶべき場所・相手・媒体

家庭で	学校で	地域で	友だちから	テレビ・インターネットなどのメディアから	その他	合計
90.6	5.3	2.8	0.0	0.0	1.2	100.0 (2111)

表21 マナーが悪くなった原因（「子どものマナーが悪くなっている」と回答した保護者のみ回答）

家庭	学校	地域	テレビ・インターネットなどのメディア	その他	合計
58.9	2.3	4.6	29.7	4.6	100.0 (1360)

メディアは、マナー教育に関しては、マイナスの影響力はあっても、プラスの教育力は有していないとするのが保護者の一般的見方である。驚かされるのは、マナー教育に関して、保護者は、学校や地域にはほとんど期待を寄せていないし、また、マナー悪化の責任をそれらに転嫁してもいないことである。

ちなみに、保護者自身は家庭のなかの誰に、最もマナーを教わったのだろうか。表22に示すように、「母親」が約7割弱、次いで「父親」、「祖母」、「祖父」と続いている。また、保護者が母親の場合と、父親の場合とでは、最もマナーを教えてくれた人に関して有意な差異がみられる。「母親」の場合は、最もマナーを教えてくれた人は「母親」（子どもとの続柄では祖母）77.1%、「父親」22.9%であるのに対して、父親は「母親」68.0%、「父親」32.0%となっている。保護者は女、男にかかわらず、多くは母親(祖母)から教えてもらっているが、母親は母親(祖母)から、父親は父親(祖父)からマナーを教えてもらうという傾向もある(表23)。

5. マナーを教えることについての考え

表24は、マナーを教えることについての保護者の考えを示したものである。「マナーを教えることは必要だ」という考えに対しては、ほぼすべての保護者が賛成している。その一方で、約2割の保護者が「どんなマナーを子どもに教えたらよいか分からない」と回答しており、必要とは分かっていても自分自身ではマナー教育のイメージを持ってないでいることがわかる。マナーは法律のように明文化されておらず、自由裁量の幅が広いので、その点で難しい。また、表24からは「(他人が)自分の家庭のマナー教育へ口出しする」ことへの是非について、保護者側の考え方が大きく二つに分かれており、同時に、「(自分が)他人の家庭のマナー教育に口を出すべきかどうか」についての考えでも大きく分かれていることがわかる。

表25は、保護者の進学期待と、「どんなマナーを子どもに教えたらよいか分からない」とをクロ

表22 保護者が育った家庭で最もマナーを教えてくれた人

母	父	祖母	祖父	姉・兄	その他	合計
66.8	20.7	7.5	1.6	0.6	2.8	100.0 (2141)

表23 続柄からみた最もマナーを教えてくれた人

		最もマナーを教えてくれた人		合計
		「母親」(祖母)	「父親」(祖父)	
続柄	母親	77.1	22.9	100.0 (1720) *
	父親	68.0	32.0	100.0 (125)

表24 マナーを教えることについての考え

	最もマナーを教えてくれた人				合計
	とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
マナーを教えることは必要である	90.2	9.5	0.3	0.0	100.0 (2285)
自分の家庭のマナー教育(躾)に口を出してほしくない	4.1	33.2	52.9	9.8	100.0 (2270)
どんなマナーを子どもに教えたらよいか分からない	1.9	17.2	57.3	23.6	100.0 (2272)
他人の家庭のマナー教育(躾)に口を出すべきではない	15.0	54.5	27.5	3.0	100.0 (2271)

スした結果である。進学アスピレーションが高い層と低い層とで比較すると、アスピレーションが低い層の方に「どんなマナーを教えたらよいかわからない」と回答する割合が高くなっていることがわかる。表7で見たように、「育てたい子どもの姿」と進学アスピレーションとは強い相関を有していた。したがって、「育てたい子どものイメージ」が明確であることが、教えるべきマナーの可視性に強く影響していることが考えられる。

ところで、「どんなマナーを教えたらよいかわからない」は、躰の程度とどのような関係にあるのだろうか。それをみたのが表26である。躰が甘い（「とても甘い」+「どちらかといえば甘い」）保護者ほど、「どんなマナーを子どもに教えてよいかわからない」と答える割合が高くなっていることがわかる。同様に、かつて保護者自身が受けた躰が甘かった（「とても甘かった」+「どちらかといえば甘かった」）保護者であるほど、「どんなマナーを教えたらよいかわからない」と回答する保護者の割合が高くなっている（表27参照のこと）。

先ほど、家庭のマナー教育への口出しの是非で、保護者側の考え方が大きく二つに分かれていることを指摘しておいた。表28は、自分の家庭のマナー教育への口出しの是非と、他人の家庭のマナー教育への口出しの是非とをクロスしたマトリックスである。

表が示すように、「自分の家庭のマナー教育に口を出してほしくない」人は、「他人の家庭のマ

表25 進学アスピレーションと「どんなマナーを教えたらよいかわからない」

		どんなマナーを子どもに教えたらよいかわからない				合計
		とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
お子さんをどの学校段階まで進学させたいと思うか	高校以下まで	4.0	25.9	49.5	20.6	100.0 (321)
	大学・大学院まで	1.7	14.6	58.6	25.0	100.0 (1633)

表26 保護者が行っている躰の厳しさ と 「どんなマナーを教えたらよいかわからない」

		どんなマナーを子どもに教えたらよいかわからない				合計
		とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
マナーやルールに関して保護者が行っている躰の程度	躰が厳しい	1.2	13.4	58.6	26.8	100.0 (1639)
	躰が甘い	3.7	27.6	53.8	14.9	100.0 (597)

表27 保護者がかつて受けた躰の厳しさ と 「どんなマナーを教えたらよいかわからない」

		どんなマナーを子どもに教えたらよいかわからない				合計
		とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
マナーやルールに関して保護者が受けた躰の程度	厳しかった	1.6	15.2	57.3	25.9	100.0 (1749)
	甘かった	3.0	24.2	57.8	15.0	100.0 (505)

表28 家庭のマナー教育へ口出しすることへの態度 []内は、全体の%を示す

		他人の家庭のマナー教育に口を出すべきではない		合計
		あてはまる	あてはまらない	
自分の家庭のマナー教育に口を出してほしくない	あてはまる	86.8 [32.4]	13.2 [4.9]	100.0 (846)
	あてはまらない	59.2 [37.1]	40.8 [25.6]	100.0 (1420) [100.0 (2266)]

ナー教育にも口を出すべきではない」と考える人がほとんどである。だが、「自分の家庭のマナー教育に口を出しても構わない」とする人に関しては、「他人の家庭のマナー教育に口を出すべきではない」と「口を出してもよい」とが大きく二分していることがわかる。

全体としてそれぞれの割合を眺めてみると（〔 〕内の％）、「口を出されるのも出すのも嫌だ」派は、32.4％、「口を出されるのは良いが、口は出したくない」派は、37.1％、「口を出されるのは嫌だが口は出す」派が4.9％、「口を出されても良いし、また出しもする」派は25.6％となる。保護者たちは、マナー教育の向上につながると考えるからであろうか、自分の家のマナー教育への他者からの口出しには案外と寛容であるとともに、他人の家庭のマナー教育には「見て見ぬふり」の姿勢をとることが多いということができらるだろう。

6. マナーを教える理由について

保護者は、子どもたちにマナーを教える理由として、どのような内容をあげているのだろうか（表29参照のこと）。日本では従来、子どもをたしなめるのに「そんなことをすると、ひとさまに笑われますよ」というのが決まり文句であった（我妻・原1974、162頁）。「恥の文化」にもとづく子どもへの躰であったといえるだろうが、今回の調査では、マナーを教える理由のなかで、「子どもが恥ずかしい思いをしないために必要だから」は、他の理由項目に比べて「とてもあてはまる」という回答が相対的に少なくなっている。マナーが守れないことで「子どもが恥ずかしい思いをする（恥をかく）」は、いわば「個人的レベルでの減点法的考え」にもとづいている。これに対して、「子どもが周囲の人間に迷惑をかけないために」は、同じ減点法的考えではありながらも、周囲の人々を慮る、より社会的レベルでの言説である。

さらに、「みんなで気持ちの良い社会を作るのに必要だから」や「子どもが円滑な人間関係を築くために必要だから」は、前者がより社会的文脈が強く、後者がより個人的文脈からの発想である点で違いはあるものの、いずれもマナーを守ることでよりよい社会や関係を作り上げることを強調する点で、加点法的考えである。保護者の中では、わが国の伝統社会に根強かった「個人一減点法」的な発想はむしろ嫌われ、それよりもより社会的で加点法的な発想に立つマナー教育への人気が高くなっているという見方も可能かもしれない。

極めつけは、「礼儀作法は必要なことだから」や「人として当たり前のことだから」という理由に対して、「とてもあてはまる」と回答している保護者が約6～7割もいることである。これは、マナーが単なる日常生活を円滑にするための手段（「ためにするもの」）として見られているのではなく、マナーはそれを守ることで自体が美しく、またカッコ良いというように、すでに保護者の中でマナー自体が目的的に身体化され、常識化していると考えられることもできよう。

表29 マナーを教える理由

	とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
みんなで気持ちの良い社会をつくるのに必要だから	62.2	35.5	2.2	0.1	100.0 (2274)
子どもが円滑な人間関係を築くために必要だから	61.6	36.1	2.3	0.1	100.0 (2274)
子どもが周囲の人間に迷惑をかけないために必要だから	67.1	30.7	2.2	0.1	100.0 (2274)
子どもが恥ずかしい思いをしないために必要だから	40.7	48.0	10.6	0.7	100.0 (2266)
礼儀作法は必要なことだから	59.0	36.6	4.2	0.2	100.0 (2271)
人として当たり前のことだから	68.4	27.8	3.5	0.3	100.0 (2275)

ちなみに、「子どもが恥ずかしい思いをしないために必要」の理由にもう少しこだわってみよう。それらは、地域や保護者の性別とどのように関係しているのだろうか。表30は、東京と地方との比較である。ここでは「とてもあてはまる」と「まあまああてはまる」を「肯定派」として括り、「あまりあてはまらない」と「全くあてはまらない」とを「否定派」としている。東京と地方とで大きな差はないものの、地方の側にマナーに恥の意味を含んで解釈する傾向が高くなっている。恥の文化はまだわずかながら地方優位といえるであろうか。

一方、保護者、とくに父母についての差異を比較したものが表31である。父親の方に否定派の割合が高くなっており、「個人一減点法」に関しては、父親側にこれを嫌う割合が高いことを示している。父親は「社会一加点法」を志向する傾向が高いとみることができるともかもしれない。

7. 社会生活を送る上でのマナー

保護者は、社会生活を送る上でのマナーをどのように考えているのだろうか。ここでは子どもとの関係でマナーを問うのではなく、保護者自身がマナーをどのように考えているかを尋ねたものである(表32)。これをみると「マナーが守られているのを見ると気持ちがいい」「社会生活を円滑に送るためにマナーは必要である」の2項目については「とてもあてはまる」が7割以上、これに「まあまああてはまる」を加えると99%以上が「あてはまる」と回答している。マナーが守られると気持ちがいいし、社会生活を送る上で不可欠と考えられていることがわかる。また「マナーのよい人には品格を感じる」という項目についても「あてはまる」と回答した保護者は95%以上に達している。

表30 マナーは子どもが恥ずかしい思いをしないため必要(東京 対 地方)

		恥ずかしい思いをしないために必要		合計
		肯定派	否定派	
エリア	東京	85.8	14.2	100.0 (535) *
	地方	89.6	10.4	100.0 (1731)

表31 マナーは子どもが恥ずかしい思いをしないため必要(父親 対 母親)

		恥ずかしい思いをしないために必要		合計
		肯定派	否定派	
続柄	母親	89.4	10.6	100.0 (2076) ***
	父親	77.4	22.6	100.0 (155)

表32 社会生活を送る上でのマナー

	とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
マナーが守られているのを見ると気持ちがいい	79.5	19.7	0.7	0.0	100.0 (2277)
マナーのよい人には品格を感じる	67.5	28.6	3.7	0.1	100.0 (2274)
私は社会生活をおくる上でのマナーを守っている	25.4	71.8	2.8	0.0	100.0 (2272)
マナーのことで他者から注意されると不愉快に感じる	7.3	40.8	47.1	4.8	100.0 (2262)
社会生活を円滑に送るためにマナーは必要である	73.5	26.0	0.5	0.0	100.0 (2275)
世の中の人、社会生活を送る上でのマナーを守っている	14.0	49.1	35.3	1.5	100.0 (2269)
マナー違反には、もっと注意するべきだ	27.5	58.9	13.1	0.5	100.0 (2269)
マナーをやかましくいう社会はきょうくつだ	2.7	22.2	57.4	17.7	100.0 (2268)

これらのことから、社会生活を送る上でマナーは必要であり、また、人々を気持ちよくさせるものである、と考えられていることがわかる。

他方で、マナーが守られているかという点、そうでもない。自分自身について言うと「私は社会生活をおくる上でのマナーを守っている」に25.4%が「とてもあてはまる」、71.8%が「まあまああてはまる」と回答しており、ほとんどの人がマナーを「守っている」と回答している。ところが「世の中の人、社会生活を送る上でのマナーを守っている」の質問項目になると、「あまりあてはまらない」35.3%、「まったくあてはまらない」1.5%となっており、3分の1以上の人はマナーが守られていないと回答している。

では、マナーが守られていないことに対してどのように対応したらよいのだろうか。「マナー違反には、もっと注意すべきだ」という質問には、「とてもあてはまる」(27.5%)、「まあまああてはまる」(58.9%)を合わせて85%以上の保護者が賛成している。他方、「マナーをやかましくいう社会はきゅうくつだ」をみると「あまりあてはまらない」(57.4%)、「全くあてはまらない」(17.7%)となっており、マナーを守れない人には積極的に注意すべきだという意見が優勢である。

以上の回答結果から考えると、「マナーは守られるべきだし、マナーが守られる社会は快適である。そして、自分自身はマナーを守っているけれど、世間一般には守れていない人が少なくない。そのような人に対しては、もっと積極的に注意すべきだ」ということになる。

ところで、このような社会生活におけるマナー意識は、社会階層といった点で違いがあるのだろうか。このデータでは、階層を測る一つの指標として、「附属」と「附属以外の学校」(公立)を用いている。この「附属」とは、国立大学教育学部に附属している小学校、中学校を指しているが、これらの学校は伝統的にエリート養成の側面を持っており、とりわけ私立の小中学校がない(少ない)地方にあっては、保護者の社会経済的背景が全般的に高いものとなっている。そうした問題意識からデータを分析すると、5つの質問項目で有意な関連のあることが明らかになった(表33参照のこと)。「マナーのよい人には品格を感じる」をはじめとして、「私は社会生活をおくる上でのマナーを守っている」「マナーが守られているのを見ると気持ちがいい」「社会生活を円滑に送るために

表33 附属／附属以外*社会生活を送る上でのマナー

		とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計	
マナーが守られているのを見ると気持ちがいい	附属	84.1	15.1	0.8	0.0	100.0 (390)	*
	附属以外	78.6	20.7	0.7	0.0	100.0 (1887)	
マナーのよい人には品格を感じる	附属	76.7	20.5	2.8	0.0	100.0 (390)	***
	附属以外	65.7	30.3	3.9	0.2	100 (1884)	
私は社会生活をおくる上でのマナーを守っている	附属	32.6	65.8	1.5	0.0	100.0 (389)	**
	附属以外	23.8	73.0	3.1	0.1	100.0 (1883)	
マナーのことで他者から注意されると不愉快を感じる	附属	8.0	37.8	50.9	3.3	100.0 (389)	
	附属以外	7.2	41.5	46.3	5.1	100.0 (1873)	
社会生活を円滑に送るためにマナーは必要である	附属	77.9	21.0	1.0	0.0	100.0 (390)	*
	附属以外	72.5	27.1	0.4	0.0	100.0 (1885)	
世の中の人、社会生活を送る上でのマナーを守っている	附属	12.8	50.0	35.9	1.3	100.0 (390)	
	附属以外	14.3	49.0	35.2	1.5	100.0 (1879)	
マナー違反には、もっと注意すべきだ	附属	25.2	58.1	16.2	0.5	100.0 (389)	
	附属以外	27.9	59.1	12.5	0.5	100.0 (1880)	
マナーをやかましくいう社会はきゅうくつだ	附属	2.3	17.2	59.2	21.3	100.0 (390)	*
	附属以外	2.8	23.2	57.0	16.9	100.0 (1878)	

マナーは必要である」「マナーをやかましくいう社会はきゅうくつだ」のいずれの項目についても、附属に子弟を通わず保護者の方が、それ以外の学校の保護者よりもマナーを守って生活していくことへの肯定感が強い。その点で、マナー意識は社会階層によって影響を受けていることは確かであるが、「世の中の人、社会生活を送る上でのマナーを守っている」「マナー違反には、もっと注意すべきだ」といった質問項目では有意な差は見られなかった。

それでは、保護者の年齢から見るとどうだろうか。年齢に関していえば、「マナーをやかましくいう社会はきゅうくつだ」という項目についてのみ有意な差が認められており、若い保護者の側が「マナーをやかましくいう社会はきゅうくつだ」と感じていることがわかる(表34参照のこと)。

続いて、項目間の相互関係についてみてみよう。

ここではとくに、表32における回答結果のうち、肯定的意見と否定的意見とがきわめて伯仲・均衡している項目、「マナーのことで他者から注意されると不愉快に感じる」に着目したい。この項目では、「あてはまる」(「とてもあてはまる」+「まあまああてはまる」) 48.1%、「あてはまらない」(「全くあてはまらない」+「あまりあてはまらない」) 51.9%であった。そこで前者を「不愉快に感じる」グループ、後者を「不愉快には感じない」グループとしよう。そして、これら二つのグループと「社会生活を送る上でのマナー」をクロスしたのが表35である。

この表を見る限りでは、マナーを守ることやマナーに対する感覚の両面において、「不愉快に感じる」グループの方が、「不愉快には感じない」グループよりも積極的かつ肯定的であり、「不愉快

表34 保護者の年齢*マナーをやかましくいう社会はきゅうくつだ

		マナーをやかましくいう社会はきゅうくつだ				合計
		とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
保護者の年齢	30代まで	3.7	25.9	52.4	18.0	100.0 (672) *
	40代	2.3	20.4	59.6	17.7	100.0 (1420)
	50代以上	2.6	20.3	60.1	17.0	100.0 (153)

表35 マナーを注意されると不愉快／不愉快でない*社会生活を送る上でのマナー

	マナーを他者から注意されると	とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
		マナーが守られているのを見ると気持ちがいい	不愉快	81.7	17.6	
	不愉快でない	77.6	21.7	0.8	0.0	100.0 (1173)
マナーのよい人には品格を感じる	不愉快	72.5	24.8	2.6	0.2	100.0 (1089) ***
	不愉快でない	63.4	31.8	4.8	0.0	100.0 (1173)
私は社会生活をおくる上でのマナーを守っている	不愉快	28.4	69.7	1.9	0.0	100.0 (1086) **
	不愉快でない	22.4	73.9	3.6	0.1	100.0 (1173)
社会生活を円滑に送るためにマナーは必要である	不愉快	74.9	24.9	0.2	0.0	100.0 (1088) *
	不愉快でない	72.2	26.9	0.9	0.0	100.0 (1171)
世の中の人、社会生活を送る上でのマナーを守っている	不愉快	17.8	48.5	32.5	1.3	100.0 (1087) ***
	不愉快でない	10.4	49.7	38.2	1.6	100.0 (1168)
マナー違反には、もっと注意すべきだ	不愉快	28.5	60.6	10.5	0.4	100.0 (1085) **
	不愉快でない	26.3	57.7	15.5	0.5	100.0 (1170)
マナーをやかましくいう社会はきゅうくつだ	不愉快	4.0	30.8	53.8	11.4	100.0 (1084) ***
	不愉快でない	1.5	14.3	60.7	23.5	100.0 (1171)

に感じる」グループはマナーの優等生ということが出来る。他者から注意されることで不愉快に感じる人は、それだけ日常生活のなかでマナーに気を使っている人であり、マナーに対して敏感な人が多いということがわかる。

ちなみに表36は、「自分の家庭のマナー教育に口を出してほしくない」という項目について、「不愉快に感じる」人々と、「不愉快には感じない」人々での反応の違いについて見たものである。この表から、「不愉快に感じる」人々の半数は「自分の家庭のマナー教育に口を出してほしくない」と思っているのに対して、「不愉快には感じない」人々では、この割合は25.5%に過ぎない。とはいえ、「不愉快に感じる」人々においても、半数は「あてはまらない」という人である。このことは、自分の家庭のマナー教育に口を出されることを不愉快に感じながらも、半数の人は他者の意見に耳を傾けようとしていることがわかる。

8. マナー違反に対する意識

ここでは、さまざまなマナー違反の行為に対する保護者側の意識を見ていくことにしたい。表37は、日常的に見かけられるさまざまな内容のマナー違反に関して、保護者がどのように感じているのかを見たものである。「絶対にいけない」の割合が高いものとしては、「バスや電車の中で子どもが他人の迷惑になっているのに親が注意をしない」(91.7%)と筆頭にして、「子どもの友達の家庭のうわさを言いふらす」(89.7%)、「親切にされても〈ありがとう〉を言わない」(89.6%)、「人におつかっても〈すみません〉を言わない」(88.4%)、「近所の人にあっても挨拶しない」(67.7%)、「参観日、授業をしている教室で親が私語をする」(54.2%)と続いている。

表36 マナーを注意されると不愉快／不愉快でない*自分の家庭のマナー教育への口出し

		自分の家庭のマナー教育に口を出してほしくない		合計
		あてはまる	あてはまらない	
マナーを他者から注意されると不愉快	不愉快	49.7 [24.0]	50.3 [24.3]	100.0 (1085)
	不愉快でない	25.5 [13.2]	74.5 [38.5]	100.0 (1159) [100.0 (2244)]

表37 マナー違反に対する意識

	絶対に いけない	仕方ない 場合もある	たまに ならよい	別によい	合計
運動会で他人の迷惑になっているのに、自分の子どもの写真を撮りつづける	47.5	45.9	6.1	0.5	100.0 (2272)
参観日、授業をしている教室で親が私語をする	54.2	37.9	7.6	0.3	100.0 (2274)
教師の指導や教育方針を十分理解せず注文をつける	53.0	43.1	3.4	0.5	100.0 (2265)
子どもの友だちの家庭のうわさを言いふらす	89.7	9.4	0.7	0.2	100.0 (2273)
バスや電車の中で子どもが他人の迷惑になっているのに親が注意しない	91.7	8.1	0.1	0.0	100.0 (2274)
バスや電車の中でお年寄りや妊婦の人などに席を譲らない	51.4	47.8	0.5	0.2	100.0 (2267)
年上の人に敬語を使わない	41.1	52.9	4.8	1.2	100.0 (2262)
親切にされても「ありがとう」を言わない	89.6	10.0	0.1	0.2	100.0 (2270)
人におつかっても「すみません」を言わない	88.4	11.2	0.3	0.1	100.0 (2270)
近所の人にあっても挨拶しない	67.7	31.3	0.6	0.4	100.0 (2270)

反対に、「絶対にいけない」の割合が相対的に少なく、その分「仕方ない場合もある」の割合が多くなっているのは「年上の人に敬語を使わない」や「バスや電車の中でお年寄りや妊婦の人などに席を譲らない」「運動会で他人の迷惑になっているのに、自分の子どもの写真を撮り続ける」「教師の指導や教育方針を十分に理解せずに注文をつける」などの項目であった。

全体としてどの項目をとっても「別によい」「たまにならよい」と答えた人は、ごくわずかであり、その意味ではマナーの精神が保護者の意識の隅々にまで、行き渡っているということができる。「バスや電車の中で子どもが他人の迷惑になっているのに親が注意をしない」の項目では、「別によい」と回答した人は、2274人の回答者のなかでわずか1名のみであり(割合の上では0%表示となっている)、少し驚いた。

こうした意識は保護者の年齢によって異なっているのだろうか。まず保護者の年齢でクロスしてみると、有意な差がみられる項目は3点あった(表38参照のこと)。「参観日、授業をしている教室で親が私語する」については、保護者の年齢が高いほど「絶対にいけない」とするものが多かった。「絶対にいけない」と回答した割合は「30代まで」52.1%、「40代」54.4%、「50代以上」60.8%であった。反対に「バスや電車の中でお年寄りや妊婦の人などに席を譲らない」についてみると「絶対にいけない」と回答した割合は「30代まで」58.1%、「40代」48.4%、「50代以上」47.1%となっており、若い保護者ほど「絶対にいけない」とする回答が多かった。こうしたデータの背景についての十分な説明はできない。いずれにしても、マナー意識は保護者の年齢によって一貫した傾向があるとはいえず、多くの項目で年齢による差異は見られなかった。

ところで、保護者の意識や価値観は子ども期の社会化の結果として形成される。その子ども期には厳しいしつけを受けた保護者もいれば、しつけの緩い家庭で育った保護者もいる。もちろん、子ども期の社会化は絶対的なものではなく、さまざまな人との出会いによって修正し、新しい価値観を身につけていく。とはいえ「三つ子の魂 百まで」ともいわれるように、子ども時代の体験は親となった時の振る舞いにも影響を与えることが予想される。すなわち、厳しいしつけを受けた親は、子どもに対しても厳しいしつけを行う傾向があるのではないかという仮説である。表39は保護者の「育った家庭で、マナーやルールに関する躰が厳しかったですか」との問いにおいて「厳しかった」「とても厳しかった」+「どちらかといえば厳しかった」と回答した保護者と、「甘かった」「とても甘かった」+「どちらかといえば甘かった」と回答した保護者の2グループに分け、マナー違反への意識を比較したものである。全体的傾向を見ると「厳しかった」と回答した保護者の方が、「甘かった」と回答した保護者より、マナー違反に対する視線が厳しくなっていることがわかる。とりわけ「絶対にいけない」と回答した割合の違いが大きかったのは、「近所の人にも会っても挨拶し

表38 保護者の年齢別に見たマナー違反への意識

		絶対に いけない	仕方ない 場合もある	たまに ならよい	別によい	合計	
参観日、授業をしている教室で親が私語をする	30代まで	52.1	36.9	10.6	0.4	100.0 (672)	*
	40代	54.4	38.9	6.4	0.3	100.0 (1425)	
	50代以上	60.8	32.7	6.5	0.0	100.0 (153)	
バスや電車の中でお年寄りや妊婦の人などに席を譲らない	30代まで	58.1	41.1	0.3	0.4	100.0 (671)	***
	40代	48.4	51.1	0.5	0.1	100.0 (1419)	
	50代以上	47.1	51.0	2.0	0.0	100.0 (153)	
親切にされても「ありがとう」を言わない	30代まで	92.7	6.7	0.1	0.4	100.0 (672)	**
	40代	88.2	11.7	0.1	0.1	100.0 (1422)	
	50代以上	90.8	7.9	0.7	0.7	100.0 (152)	

ない」「教師の指導や教育方針を十分理解せず注文をつける」「バスや電車の中でお年寄りや妊婦の人などに席を譲らない」などの項目であり、これらの項目では10%近い差が見られた。全体として、仮説通りの結果が得られたといえよう。有意差のみられない項目は「親切にされても〈ありがとう〉をいわない」の一つだけであった。

9. 子どものマナーは悪化しているか

表40は、保護者がどの世代のマナーが悪いと思っているのかを尋ねた結果である。それをみると、「中・高校生」と回答した保護者が最も多く39.7%、続いて「30-40代の大人」18.4%、「50-60代の大人」17.7%、「高齢者世代」9.7%、「小学生」5.7%となった。保護者にとっては「中・高校生」のマナーの悪さが目立つようである。

これを「小学生の親」と「中学生の親」に分けて考察してみるとどうだろうか。それを示したのが表41である。興味深いことに、「小学生の保護者」はとりわけ「中・高校生」のマナーが悪いと考え、逆に「中学生の保護者」は「中・高校生」のマナーが悪いという意識が弱まり、「小学生」のマナーが悪いと感じる割合が相対的に増している点である。小学生の親は「中・高校生」のマナーが悪いと考え、逆に、中・高校生の親は「小学生」のマナーが（相対的に）悪いと考えている点は興味深い。

表39 保護者の受けた躰とマナー違反への意識

	受けたしつげが	絶対に いけない	仕方ない 場合もある	たまに ならよい	別によい	合計	
運動会で他人の迷惑になっているのに自分の子どもの写真を撮りつづける	厳しい	49.1	44.7	6.0	0.2	100.0 (1753)	***
	甘い	41.5	50.3	6.4	1.8	100.0 (501)	
参観日、授業をしている教室で親が私語をする	厳しい	55.4	37.8	6.4	0.3	100.0 (1753)	**
	甘い	49.9	38.4	11.3	0.4	100.0 (503)	
教師の指導や教育方針を十分理解せず注文をつける	厳しい	55.5	41.3	3.0	0.2	100.0 (1749)	***
	甘い	44.6	49.4	4.6	1.4	100.0 (498)	
子どもの友だちの家庭のうわさを言いふらす	厳しい	90.5	8.6	0.8	0.1	100.0 (1753)	**
	甘い	86.7	12.2	0.6	0.6	100.0 (502)	
バスや電車の中で子どもが他人の迷惑になっているのに親が注意しない	厳しい	92.9	6.9	0.1	0.1	100.0 (1753)	**
	甘い	87.5	12.3	0.2	0.0	100.0 (503)	
バスや電車の中でお年寄りや妊婦の人などに席を譲らない	厳しい	53.5	46.0	0.5	0.1	100.0 (1747)	**
	甘い	44.4	54.2	0.8	0.6	100.0 (502)	
年上の人に敬語を使わない	厳しい	42.8	52.2	4.2	0.8	100.0 (1745)	***
	甘い	35.2	55.0	7.2	2.6	100.0 (500)	
親切にされても「ありがとう」を言わない	厳しい	90.3	9.4	0.1	0.2	100.0 (1752)	
	甘い	87.4	12.0	0.2	0.4	100.0 (500)	
人にぶつかっても「すみません」を言わない	厳しい	89.4	10.2	0.3	0.1	100.0 (1750)	*
	甘い	85.1	14.3	0.2	0.4	100.0 (502)	
近所の人に会っても挨拶しない	厳しい	70.2	29.1	0.5	0.2	100.0 (1751)	***
	甘い	59.4	38.6	1.2	0.8	100.0 (502)	

表40 最もマナーが悪いと思う世代・年代

小学生	中・高校生	大学生	30-40代の大人	50-60代の大人	高齢者世代	合計
5.7	39.7	8.9	18.4	17.7	9.7	100.0 (1996)

マナーの悪さは、自分たち以外のところに見つかりやすいという傾向があるようだ。

最後に、保護者は最近の子どもたちのマナーが悪くなっていると考えているかどうかを見てみよう。表42は「自分が子どもだった頃に比べ、最近の子どものマナーは悪くなっていると思いますか」という質問への回答結果である。これを見ると「とても悪くなっている」9.9%、「どちらかといえば悪くなっている」52.7%、「変わらない」31.3%、「どちらかといえば良くなっている」6.0%、「とても良くなっている」0.1%、となっており、「どちらかといえば」を含めて、「悪くなっている」と感じている保護者は6割を超えることがわかる。反対に「良くなっている」と思っている保護者は「どちらかといえば」を含めても6%程度に過ぎない。個人的には最近の子どもたちのマナーが悪くなっているとは思わないので、どうしてこのような結果が出てくるのか、興味深い。一つは、携帯電話に代表されるようにかつての子どもが持たなかったものを現代の子どもたちは持つようになり、マナーを守らなければならない領域や空間が増えたこと、二つは、マナーに対する関心が強くなり（マナー過敏社会）、その分だけマナー違反が目立つようになっている、三つは、そもそも子どもに注がれるまなざしが増えており、少しのマナー違反にも過剰に反応する社会になっている、このようなことが考えられるのではないか。

では、「悪くなっている」と感じる割合は、どのような層で高くなっているのでしょうか。これを、保護者自身が育った家庭でのしつけの様子とクロスして考えてみよう。表43は、家庭でのしつけが厳しかったと考えている保護者と、甘かったと考えている保護者に分けて分析したものである。その結果では、「厳しかった」と回答した保護者ほど、最近の子どものマナーが悪くなっていると思っていることがわかる。「厳しかった」と回答した保護者の67.1%は、子どものマナーが悪化していると回答しているのに対して、「甘かった」と回答した保護者では47.1%に過ぎなかった。

10. 調査結果のまとめ

(1) 「育てたい子どもの姿」に関する保護者の中心的イメージは、「心のやさしい子ども」や「礼儀やルールを守る子ども」の姿であり、「上品な子ども」や「勉強ができる子ども」の姿はそれほど重視されていない。勉強については、中学生になると「できる」「できない」がはっきりしてくるの

表41 子どもの年齢段階別に見た「最もマナーが悪いと思う世代・年代」

		最もマナーが悪いと思う世代・年代						合計	***
		小学生	中・高校生	大学生	30-40代の大人	50-60代の大人	高齢者		
保護者の子どもの学年	小学生	4.1	45.9	8.3	15.9	16.9	8.9	100.0 (980)	
	中学生	7.2	33.8	9.4	20.8	18.4	10.4	100.0 (1016)	

表42 最近の子どものマナーは悪くなっているか

とても悪くなっている	どちらかといえば悪くなっている	変わらない	どちらかといえば良くなっている	とても良くなっている	合計
9.9	52.7	31.3	6.0	0.1	100.0 (2269)

表43 育った家庭でのしつけ環境とマナー悪化への意識

	自分が子どもだった頃と比べ最近の子どものマナーは			合計	***
		悪くなっている	悪くなっていない		
育った家庭でのしつけ	厳しかった	67.1	32.9	100.0 (1752)	
	甘かった	47.1	52.9	100.0 (501)	

- で、勉強のできない子に勉強を望んでも仕方がないという側面があるのかも知れない。
- (2) 「附属」の保護者に関しては、「上品な子ども」と「勉強ができる子ども」をより強く望む傾向がある。
 - (3) かつて「厳しい躰」を受けた保護者は、自分たちの子どもに対しても「厳しい躰」をする傾向がある。
 - (4) 出生順位が第一子であるほど厳しい躰をする傾向がある。第二子、三子、四子となるにつれ、躰の程度は甘い方向へと傾斜していく傾向がみられる。
 - (5) 「挨拶ができる」や「食事の作法を守る」といった、「型」を伴う基本的な躰内容に関しては、若い世代の保護者ほど「非常に重視している」と回答する割合が高い。
 - (6) 躰における内容では、父親よりも母親に、地方よりも東京に、そして附属以外の学校よりも附属校の方に「非常に重視している」と回答する割合が高くなる。
 - (7) マナー教育に関しては、保護者側は、学校や地域にはほとんど期待を寄せていないし、同時に、マナー悪化の責任をそれらに転嫁してもいない。
 - (8) 「自分の家庭のマナー教育に口を出してほしくない」人は、他人の家庭のマナー教育にも口を出すべきではないと考える人がほとんどである。
 - (9) 「どんなマナーを教えてよいかわからない」とする回答は、進学アスピレーションの高低と相関しており、進学期待が低い保護者ほど「わからない」とする割合が高くなっている。その意味では、マナーに対するアノミー状況が見られる。
 - (10) マナーを教える理由において、「子どもが恥をかかないために必要」とする意識は父親よりも母親の方に高い。
 - (11) 附属の保護者は、マナーの良い人に品格を感じる割合が高く、また実際にマナーを守っている割合が高い。
 - (12) 若い年齢の保護者であるほど「マナーをやかましくいう社会」をきゅうくつだと感じている。
 - (13) 受けた躰が厳しかった保護者ほどマナー違反に対する厳しい視線もっている。
 - (14) 参観日での私語については、若い人より年齢の高い人の方が、母親よりも父親の方が厳しい見方をしている。これに対して、バスや電車の中でお年寄りなどに席を譲らないことに関しては、年齢の若い年齢層の方に「絶対にいけない」という厳しい判断の割合が高くなっている。また、バスや電車の中での迷惑な子どもに注意しないことに関しては、父親よりも母親が厳しい見方をしている。
 - (15) 保護者の子どもが小学生である場合には、中高校生のマナーを悪いと感じる割合が増し、反対には、中学生である場合には、小学生のマナーが悪いと感じる割合が相対的に増している

IV. おわりに

個人情報への配慮や保護者のクレームを恐れる理由から、学校でのアンケート調査が年々困難になってきている今日の状況のなか、今回の調査において、保護者も含めると6,000ケース近いサンプルが集まったことは特筆すべきであろう。これらのサンプルはいわば「宝物」である。だが、今回のわれわれの分析を一言で表現するとすれば、「宝物のカタログを少しだけ取り出して見せた」ということにもなるだろうか。

マナーの社会的機能を考察するには、今回のような単純集計とクロス集計との寄せ集めからは困難であり、今後は、より精緻で複雑な統計的分析を行ってゆく必要があるだろう。また同時に、今回は紹介できなかった自由記述欄の内容分析も繰り返しながら、より立体的な考察をほどこしてゆくことが求められる。さらにいえば、子どものマナー意識・行動と、保護者側のそれとがどのよう

な連関性をもつのか(あるいは持たないか)についても、より仔細な検討を行ってゆかねばならない。とりわけ、「マナーやルールに関する躰しつけの中で、お子さんに対して特に力を入れて伝えていることにはどんな内容がありますか」「あなたが育った家庭の躰しつけの中で、特に〈口やかましく〉いわれたマナー、役に立っているマナーには、どんな内容がありますか」を自由記述の形でたずねており、膨大なデータが収集されている。これらのデータは、1980年代以降の家庭教育の変容に迫れるだけでなく、日本社会の親子関係や規範意識の変容などとも関係するものであり、データの分析が急がれる。

子どものマナーが悪くなったといわれるなか、今回の調査結果を見る限りでは、実際には大半の子どもとその保護者が、マナーに関して高い意識を有し、またマナーを守って行動していることが明らかになった。「宝物のカタログ」提示に近い今回の報告だったが、この点ではきわめて大きな意味があったのではないかと考える。

(注)

- 1) 当時のエチケット(マナー)の悪さを嘆く記事には事欠かない。一例として、1960年5月7日付けの朝日新聞(東京本社・朝刊)の記事「連休エチケット採点 団体さんは最低 復旧作業に泣く観光地」をあげておく。なお、戦前における日本人のマナーの悪さについては、大倉幸宏が数々の資料をもとにして指摘している。
- 2) アジア圏初のオリンピック開催を間近に控えた東京では、大規模な「新生活運動」が全都民によって実践され、衛生面やエチケット(マナー)を含めた公德心の向上がめざされた(東京都オリンピック準備局編1951、『東京都オリンピック時報』[第二巻第二号]、19-20頁)。
- 3) 「嫌い箸」は、すでに室町時代に登場する箸のタブーである。時代とともにその解釈には若干の変化があるとされる。「渡し箸」をはじめとして、「寄せ箸」「迷い箸」「にぎり箸」「さぐり箸」「移り箸」「刺し箸」「横箸」「ねぶり箸」などがある(熊倉1999、377-381頁)。

【参考・引用文献・映像作品一覧】

- 井上忠司「食空間と団らん」石毛直道監修、井上忠司責任編集『講座・食の文化(第五巻) 食の情報化』(財団法人)味の素食の文化センター、1999年
- 岩村暢子『家族の勝手にしょ！一写真274枚で見る食卓の喜劇』新潮社、2010年
- 大倉幸宏『昔はよかった』と言うけれど―戦前のマナー・モラルから考える』新評論、2013年
- 河北秀也『河北秀也のデザイン原論』新曜社、1989年
- 河北秀也『元祖！ 日本のマナーポスター』グラフィック社、2008年
- 熊倉功夫『文化としてのマナー』岩波書店、1999年
- 熊倉功夫「日本の食事作法」石毛直道監修、井上忠司責任編集『講座・食の文化(第五巻) 食の情報化』(財団法人)味の素食の文化センター、1999年
- 帝都高速度交通営団『マナーポスター100 世相10年』帝都高速度交通営団、1983年
- 大門正克編『新生活運動と日本の戦後―敗戦から1970年代』日本経済評論社、2012年
- 東京オリンピック準備局編『東京都オリンピック時報』[第二巻第二号]東京オリンピック準備局、1961年
- 西本佳代・村上光朗・古賀正義・越智康詞・松田恵示・加野芳正「大学生のマナーに関する実証的研究(上)」『香川大学教育学部研究報告・第I部・第135号』2011年
- 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか―「教育する家族」のゆくえ』講談社現代新書、1999年
- 福田育弘『「飲食」というレッスン―フランスと日本の食卓から』三修社、2007年
- 森 真一『ほんとはこわい「やさしさ社会」』ちくまプリマー新書、2008年
- 森田芳光監督作品『家族ゲーム』ATGビデオ文庫 TOHO VIDEO、1983年

村上紀子「現代人の食事マナー観」石毛直道監修、井上忠司責任編集『講座・食の文化(第五巻) 食の情報化』(財団法人)味の素食の文化センター、1999年
我妻 洋・原ひろ子『しつけ』弘文堂、1974年

【謝辞】

本研究のデータ収集には香川県をはじめ、東京都、長野県、兵庫県、鹿児島県にある多くの学校の協力をいただきました。本研究の趣旨に賛同いただき、質問紙の配付や回収に御協力いただいた小学校・中学校の校長先生、教頭先生、担任の先生には厚く御礼申し上げます。また、お忙しい時間を割いて質問紙の回答に御協力いただいた保護者の皆さんにも厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

なお、本研究は平成23-25年度科学研究費(基盤研究B)「マナーと人間形成に関する総合的研究」(代表 加野芳正 課題番号23330226)による研究成果の一部である。